



水路近くの砂地、地盤緩く

金大・塚脇教授

(日本応用地質学会
中部支部顧問)

日本応用地質学会中部支部の顧問を務める金大環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授は、内灘町北部の西荒屋や宮坂、室地区が河北潟の水路近くに位置する砂地であるため地盤が緩く、液状化が甚大だったとの見方を示す。

液状化は砂地で、緩い砂の層が地下水に満たされている場所で発生する現象であり、地震によって激しく揺れると砂粒が移動する。

塚脇氏は地震発生後に現地調査し、西荒屋地区では地震の揺れに伴い県道周辺で最低でも1メートルほど動いているのが確認できると指摘。「詳細な調査結果が出るのはこれからだが、予想以上にひどい状況だ」と話した。一方で、一度発生すると地盤が安定するとし「同じところで何度も液状化することはない」と述べた。

液状化の被害を受け、傾いた家屋や道路

15日午後0時40分、内灘町西荒屋